

後鳥羽院の『狭衣物語』受容

後藤, 康文
宮崎大学教育学部助手

<https://doi.org/10.15017/11919>

出版情報 : 語文研究. 69, pp.25-32, 1990-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

後鳥羽院の『狭衣物語』受容

後藤康文

『新古今集』を實質的に親撰したといえる後鳥羽院は、時の新風を最もよく体現した歌人のひとりでもあった。そして、その中核的手法すなわち本歌取りを焦点に『後鳥羽院御集』を通覧するに、院が『万葉集』から当代に至る夥しい和歌の堆積の中から、まさに貪婪な先行歌撰取を行なっていることが知られるのである。その対象は当然『伊勢物語』や『源氏物語』等の物語類にまで及んでいるが、本稿では特に、後鳥羽院が『狭衣物語』をどのように自作の内に取りこんでいるかについて、この物語の受容史の立場から具体的な指摘を試みたいと思う。

(I) 正治二年院初度百首

『狭衣物語』の影響は、後鳥羽院が本格的な作歌活動に入った正治二年(1200)八月の「院初度百首」においてはやくも認められる。

19 すぎがてに井手のわたりを見渡せばいはぬ色なる花の夕映え

春二十首中のこの一首、山吹の名所「井手のわたり」の晩春の暮景を詠んでいるが、これは、次に掲げる『狭衣物語』の冒頭を強く意識した作であると思われる。

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、弥生の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は松にとのみ思はず咲きかかりて、山時鳥待ち顔なるに、池のみぎはの八重山吹は井手のわたりにことならず見渡さるる夕映えのをかしさを、ひとり見給ふもあかねば、侍童のをかしげなるして、一枝づつ折らせ給ひて、源氏の宮の御方にもて参り給へれば、〈中略〉「この花の夕映えこそ、つねよりもをかしく侍れ。春宮の、『盛りにはかならず見せよ』とのたまはするものを」ととうち置き給ふを、宮少し起き上がりて見おこせ給へる御まみ、つらつきなどのうつくしき、花のにはほひ藤のしなひにもこよなくまさりて見え給ふを、例の、胸ふたがりまさりて、つくづくとまばらせ給ふに、〈中略〉

いかにせんいはぬ色なる花なれば心の中をしる人ぞなき

院の歌の第二句・第三句は、物語散文部分中の「井手のわたりにことならず見渡さるる」に、また結句は、主人公狭衣の言葉に見える「花の夕映え」にそれぞれ依拠したものと考えられ、さらに「いはぬ色なる花」という表現は、明らかに狭衣の心中詠より学んだものなのである。そういえば、新風の旗手、歌人定家の誕生を告げる「初学百首」(養和元年・1181)において、やはりこの狭衣歌を露骨に踏まえた一首「いかにせん袖のしがらみかけそむる心の中をしる人ぞなき」が詠まれているのも、興味深い事実ではないか。

ところで、後の後鳥羽院の作に漂う「花の夕映え」の中を「すぎがて」に立ちやすらう趣きは、同時に、『狭衣物語』のラストシーンをも髣髴とさせないであろうか。

消えはてて屍は灰になりぬとも恋の煙は立ちも離れじ

〔中略〕御前の花盛りに咲きみだれて、夕露おもたげにて紐解き渡したる色々、いづれともなく見置きがたき中にも、女郎花の、人の見ることもやくるしからん、霧の絶え間わりなげなる気色にて立ち隠れたるは、なほいとすぎがたくおぼしめさる。

立ち返り折らですぎ憂き女郎花なほやすらはん霧の紛れにとながめいらせ給へる御かたちの夕映え、「なほ、いとかかるためしはあらじ」と見えさせ給へるに、世とともにものをのみおぼしてすぎ給ひぬるこそ、いかなりける前の世の契りにかとこそ見え給へれ。

(巻四・292～293頁)

あるいは、この折の院の脳裏には、『狭衣物語』の首尾が重ね合わされるかっこうで存在していたのかも知れない。そのような目で見ていると、同じ春二十首のうちにもう一首、注意すべき歌があるのに気づかされる。

17 吉野山こずゑさびしくなりぬともなほやすらはん花のあたりは

たとえ桜の花が散りすぎてもなお吉野を立ち去りがたい風情の歌だが、その第三句は、前掲『狭衣物語』末尾の「消えはてて」歌の第三句より、そしてその第四句は、続く狭衣の独詠「立ち返り」歌の第四句より、双方を繋ぎ合わせる形で取られているのではなからうか。後鳥羽院は、『狭衣物語』に描かれた女郎花咲き乱れる嵯峨野の秋の情景を、吉野山の桜を詠んだ春の歌に置き換えて撰取したものと想像されるのである。

「正治二年初度百首」において『狭衣物語』受容の形跡が明瞭に窺えるのは以上の二首にとどまるが、そのほかの作にも、あるいはと思わせるものがないではない。たとえば、夏十五首の、

23 夜もすがら宿のこずゑに時鳥まだしきほどの声をつつかな

は、巻一の狭衣の独詠「夜もすがら歎き明かして時鳥鳴く音をだにも聞く人もがな」(21頁)の初句及び第三句を念頭に置いたものかとも考えられ、院晩年の「詠五百首和歌」の中にも、

15 夜もすがら涙やそそぐ時鳥けさは露けき軒の橘

といった類型を見出すことができる。ついで秋二十首のうち、次に掲げる二首。

52 きりぎりすうらむる声も庭の荻の末越す風も秋ふけにけり

54 佐保姫の染めし緑や深からん常盤の森はなほもみぢせで

前者の場合、直接には『順集』の歌「荻の葉の末越す風の音よりぞ秋のふけゆくほどはしらるる」を踏まえたものと見るべきであろうが、同じくこの歌を本歌とし、中世和歌に影響を及ぼしたことの確実な『狭衣物語』巻三の狭衣と女二宮の歌、「折れかへり起き臥しわぶる下荻の末越す風を人の問へかし」(69頁)・「憂き身には秋もしらるる荻原や末越す風の音ならねども」(71頁)の存在も無視できないのではなからうか。一方後者については、やはり巻三の飛鳥井女君の遺詠二首、「頼め来しいづら常盤の森やこれ人頼めなる名にこそありけれ」及び「言の葉をなほや頼まんはし鷹のとかへる山はもみぢしぬとも」(103頁)あたりが響いていると考える余地があるように思われる。

あとの三首に『狭衣物語』の直接の影響を主張することは強弁にすぎようが、ともかくも、「正治二年院初度百首」の段階で後鳥羽院の作歌における『狭衣物語』受容は、すでに始まっていたのである。

(II) 『新古今集』完成期まで

『新古今集』の選定が緒に着いたのは翌建仁元年(120)七月。元

久二年(1205)三月に行なわれた竟宴ののちも刃り迷ぎは繰り返され、和歌史上最も重要な歌集のひとつとなるこの勅撰集が完成されたのは、承元四年(1210)に入ってからのことであった。この間十年、後鳥羽院は歌壇の中心となってさまざまな和歌会を催すとともに、自らも意欲的な作歌活動を展開したのであるが、この期における院の『狭衣物語』撰取の実態はいったいどのようなものであったろうか。そこではまず、その影響が断定できる作から、順次指摘してゆきたいと思う。

「建仁元年三月尽新宮撰歌台」。嵐吹寒草という題の詠作、

1532 草の原露の宿りを吹くからに風にかはる道芝の霜

は、『源氏物語』花宴巻の臘月夜尚侍と光源氏との贈答、「憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」・「いづれぞと露の宿りをわかんまに小笹が原に風もこそ吹け」を遠景に抱きつつ、『狭衣物語』巻二巻頭部の狭衣の独詠、「尋ぬべき草の原さへ霜枯れてたれに問はまし道芝の露」(79頁)を確かに取りこんでいることが知られる。この狭衣の歌は後代の和歌に好んで受容されているが、院自身も四年後の「日吉社三十首」で再び、

1341 冬深き草の原なる霜のうへにいとどさびゆく風の音かな

という歌を残している。

史上空前の催しとなった「千五百番歌合」のため、同年六月に詠まれた百首歌。冬十五首中の、

498もみちするほどは時雨のむら雲に空行く月のめぐりあふらん

は、『伊勢物語』十一段(『拾遺集』雑上)の「忘るなよほどは雲になりぬとも空行く月のめぐりあふまで」という名歌に大きく拠った詠作であるが、第三句中に「むら雲」なる語が現われるのは、やはりこの『伊勢物語』歌を踏まえた『狭衣物語』巻四の狭衣の歌、「めぐりあはんかぎりだになき別れかな空行く月のはてをしらねば」(249頁)と、これに答えた源氏宮の歌、「月だにもよそのむら雲へだてずはよなよな袖に宿しても見ん」(250頁)が、院の念頭にあったからではあるまいか。また同じ冬歌には、

492深山吹く四方の木枯らしさえそめて槇の葉しろく初雪ぞ降る

という作があるが、ここで用いられた歌語「四方の木枯らし」は、『狭衣物語』巻二の女二宮の歌「吹きはらふ四方の木枯らし心あらば憂き名を隠すくまもあらせよ」(317頁)に由来するものである。

「元久二年三月日吉社三十首」、冬歌の六百目。

1342冬来てもそら頼めなる緑かないづら常盤の森の木枯らし

この歌は、前節ですでに引用した巻三の飛鳥井女君の遺詠「頼め来しいづら常盤の森やこれ人頼めなる名にこそありけれ」(183頁)に明らかに依拠したものである。

そして、承元元年(1207)十一月の「最勝四天王院名所障子和歌」

には、巻一の飛鳥井女君の歌、「楳緒絶え命も絶ゆとしらせばや涙の海に沈む舟人」(270頁)を意識的に取りこんだ一首、

1420楳緒絶え夢路も絶えぬ沖つ風吹き上げの浪の音の荒さに

が見えている。

そのほか、筑紫へと連れ去られ行く飛鳥井女君を描いた左の一場、

海のおもては来し方行く末も見えず、はるばると見渡されたるに、寄せかへる波ばかり見えて、舟のはるかに行くが心細き声して、「虫明の瀬戸へ今宵」と歌ふも、いとあはれに聞ゆ。

流れても逢ふ瀬ありやと身を投げて虫明の瀬戸に待ちこころみん

とて、袖を顔に押しあててとみにも動かれぬほどに(下略) (巻一・271頁)

とりわけ女君の絶唱によって、この時代の和歌に詠みこまれるようになった「虫明」の地名も、建仁元年三月の「内宮百首」(290番)、同年九月の五十首歌(1185番)に見え、さらに、のちのものではあるが、隠岐での「詠五百首和歌」中にも現われている(807番)。

次に、これらほど明確ではないが、『狭衣物語』が関与している可能性を多少なりとも感じさせるものについて、ひととおり触れておけば、「正治二年院一度百首」神祇の、

151 五十鈴川頼む心し深ければ天照る神ぞ空にしるらん

は、『狭衣物語』巻一の狭衣の歌、「年経とも思ふ心し深ければ安積の沼に水は絶えせじ」（211頁）と、「建仁元年三月内宮百首」冬十五首の、

211 立田山木の葉吹きはらふ木枯らしにひとりつれなき嶺の松かな

は、前出の「吹きはらふ四方の木枯らし心あらば憂き名を隠すくまもあらせよ」（211頁）と、それぞれまったく無関係だとはいきまゝいし、また、同じく巻一の狭衣詠、「思ひつつ岩垣沼のあやめ草みごもりながら朽ちはてねとや」（211頁）を享受したかと思われる作、

1113 あやめ草岩垣沼のねをたえずけふは袂のほひとぞなる

1596 さてもいかに岩垣沼のあやめ草あやめもしらぬ袖の玉水

もある。一首目は建仁元年二月の「老若五十首歌合」、二首目は翌年九月の「水無瀬桜宮十五番歌合」での詠歌であるが、前者には加えて、先の「思ひつつ」歌の直前に配された狭衣の歌、「恋ひ渡る袂はいつもかかぬにけふはあやめのねさへなかれて」（211頁）からの影響もあるかもしれない。

さらに、建仁元年十二月の「鳥羽殿影供歌合」時に、寒夜冬月を詠んだ、

1561 深き夜の霜を千里にながむれば月に残れる武蔵野の秋

は、巻三の「武蔵野の霜枯れに見しわれもかう秋しも劣るにほひなりけり」（83頁）という狭衣の歌を、そして、月前雪を詠んだ、

1565 山風の木の間の雪を吹くからに心づくしの冬の夜の月

は、『古今集』秋上の「木の間より漏り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり」とともに、『狭衣物語』巻四の狭衣詠、「歎きわび寝ぬ夜の空ににたるかな心づくしの有明の月」（211頁）を、おのおの念頭に置いていた可能性があり、元久元年十一月の「賀茂下社三十首」の秋歌、

1272 大方の秋とはしらでながむともしるくもあるべき袖の露かな

及び翌二年三月「日吉社三十首」の秋歌、

1333 もの思ふたれになれたる秋風のただ大方の袖に吹くらん

は、巻四に見える源氏宮の詠、「あはれそふ秋の月影袖ならで（なれてイ）大方にのみながめやはする」（255頁）に、あるいは関係あるかと感じられる。

(III) 承久の乱まで

『新古今集』の完成を境に後鳥羽院の作歌への興味は急速に失われて行ったようであり、承久三年(1221)の乱に敗れ隠岐配流に至る間に生み出された院の御製は必ずしも多くはない。したがって、『狭衣物語』との関わりをにおわせる歌も、建保四年(1216)二月の百首歌において詠まれた次の二首にとどまるものと思われる。

575 五月雨に水ゆきまさる飛鳥川淵瀬も見えぬ浪のかよひ路

576 常盤木と頼めし人も秋立ちて言の葉ながら色かはるころ

はじめの一首は、卷一の飛鳥井女君の歌、「渡らなん水まさりなば飛鳥川あすは淵瀬となりもこそすれ」(575頁)を中心として、またあとの一首は、同じく飛鳥井女君の三つの詠「かはらじといひし椎柴待ち見ばや常盤の森に秋や見ゆると」(巻一・263頁)・「頼め来しいづら常盤の森やこれ人頼めなる名にこそありけれ」(巻三・前出)・「言の葉をなほや頼まんはし鷹のとかへる山はもみぢしぬとも」(巻三・前出)を意識して、それぞれにこの悲劇のヒロインのイメージを漂わせる世界を形象化したものではなからうか。

(IV) 遠島以後

隠岐の島における失意の生活の中で、院の心は再び作歌へと回帰

して行った。樋口芳麻呂氏が「遠島五百首」と呼び文暦二年(1235)頃の詠出かと推定する「詠五百首和歌」は中でも庄巻であり、『狭衣物語』を受容した詠作もここに集中的に見出せるのである。はじめに、恋百首。決定的な被影響歌は控えめに見ても四百首ほど存在する。

959 思ひいる恋の道芝秋すぎて問はで枯れぬる草の原かな

962 かはらじといひし椎柴いかならん四方の山辺も時雨降るころ

963 谷深く立つをだまきの心地して思ひも袖も朽ちやはてなん

970 歎きつつ寝ぬ夜の空の月影を恋しき人の形見にぞ見る

959 番歌が、『狭衣物語』巻一最初の狭衣の独詠、「尋ぬべき草の原さへ霜枯れてたれに問はまし道芝の露」(前出)に拠り、962 番歌が、巻一の飛鳥井女君の歌、「かはらじといひし椎柴待ち見ばや常盤の森に秋や見ゆると」(前出)の初二句をそのまま踏襲した作であることは一目瞭然であり、また963 番歌は、巻三巻頭部の「谷深み(深くイ)立つをだまきはわれなれや思ふ心の朽ちてやみぬる」(7頁)という狭衣詠を本歌とし、970 番歌は、巻四の狭衣の歌、「歎きわび寝ぬ夜の空にたるかな心づくしの有明の月」(前出)を明らかに念頭に置いて詠み出されているのがわかる。

上記の四首以外では、

978 恋ひわぶる涙にくもる秋の空見しやその夜の月なへだてそ

が、巻四の狭衣詠、「恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる」(295頁)及び源氏宮の歌、「月だにもよそのむら雲へだてずはよなよな袖に宿しても見ん」(前出)との、

983 風の音の頼めし暮れににたるかな思ひ絶えにし庭の萩原

が、すでに再三掲げた両首、「憂き身には秋もしらるる萩原や末越す風の音ならねども」(巻三・71頁)及び「歎きわび寝ぬ夜の空ににたるかな心づくしの有明の月」(巻四・201頁)との関連を想定させるほか、

989 ふけにけりなかなかなに頼みけん人の契りも浅茅生の宿

は、巻二における狭衣の歌、「死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかなに頼め(頼みイ)そめけん」(290頁)を、

952 思へただ逢ふ夜まれなる明け暮れに露消えわびし人の面影

は、「下萩の露消えわびしよなよなも問ふべきものと待たれやはせし」(71頁)という巻三の女二宮の詠歌を、さらに次の二首、

907 歎きあまりおさふる袖の隙をあらみ色に出でぬるわが思ひかな

947 わが涙時雨とともにふる里の浅茅がもとを問ふ人もがな

は、巻二の狭衣の歌、「人しれずおさふる袖も」(ぼるまで時雨とともに降る涙かな) (295頁)を、おのおの意識していた可能性が窺えるだろう。

さて、これら恋百首以外の詠作では、まず夏五十首の、

709 神山に木綿かけて鳴く時鳥椎柴隠れしはし語らへ

が、『狭衣物語』巻二の狭衣の歌、「神山の椎柴隠れ忍べばぞ木綿をもちくる賀茂の瑞垣」(376頁)をはっきりと踏まえ、冬五十首の、

899 いかにせんよそなる春は飛鳥川流るる年はしがらみもなし

が、巻一冒頭部の狭衣詠、「いかにせんいはぬ色なる花なれば心の中をしる人ぞなき(もなしイ)」(前出)と、巻二の狭衣詠、「涙川流るるあとはそれながらしがらみとむる面影ぞなき」(349頁)とを合わせて利用しているほか、雑百首の、

1059 うき舟のこがれて渡る浪の上によるべしらせよ沖つ潮風

も、「うき舟のたよりに行かんわたつ海のそこと教えよ跡の白浪」(379頁)という巻二最後の狭衣の歌に依拠した作であろうと考えられるのである。

*

後鳥羽院の作歌における『狭衣物語』受容の実態は、およそ以上のようなものであったと思われる。

注

(1) 本稿で扱う『後鳥羽院御集』の本文及び歌番号はすべて『新編国歌大観』に拠る。また、『狭衣物語』の作中歌・本文の引用には古活字本を底本とする日本古典全書本を用いるが、異文参照の必要がある場合はこれを随時掲出する。

(2) 『王朝の歌人10 後鳥羽院』(昭60、集英社)